

自分の人生を振り返ると、たった20数年であってもこれまで歩んできた時間の重みに感じ入らずにはいられない。歩んできた道を後戻りすることはできない。前に進むだけである。一方通行の時間の中で私達は徐々に変性し、時に決断を迫られる。変性とは、繰り返される日々の中で徐々に人の性質が変わることである。日々の努力の積み重ねが大きな力になるとよく言われるが、逆に日々の怠慢の積み重ねが容易には回復できないような遅れにつながってしまうこともある。少しずつ伸びていく身長に自分自身は気付かないように、私達は徐々に変性する自分に意識的ではないけれど、時間が積もれば大きな変化が生ずる。決断とは、複数の可能な選択肢から一つを選んで実現することである。スーパーマーケットで何を買うかという決断から、配偶者選びまで重要度はまちまちであるが、人が決断を迫られない日など一日たりともないことだけは確実に言えるだろう。変性とは対照的に決断は意識的であり、しばしば決断を誤って後悔することもある。

人はそれぞれ異なる道を歩んでいく。人はそれぞれ別様な日常に生きて別様な変性を遂げ、別様な状況で別様な決断をするということである。生きた時間の長さで決断の数に比例して、われわれの歩む道は散開していく。はじめは近くの同じような道を歩んでいた子供達が、大人になるにつれて互いの顔も見えなくなる。歩む道の多様性こそが、社会の抱合する多様性である。この散開は取り返しのつかないものである。歩んできた道を逆戻りできないのは言うまでもないが、進行方向を変えて他の人が歩む道に近づくことも容易ではないし、接近したとしても、合流して旅の道連れになることはできない。

孤独な道のりの寂しさを紛らわしたくなることもあるかもしれない。似た者同士で足並みを揃えることは、この孤独の慰めになるだろうか。似た者に囲まれていることによって、人生の取り返しのつかないことを隠蔽することはできるかもしれない。だが隠蔽したところで、時間による変性と決断を避けられるわけではない。同じような方向に進むものだけを見れば、相対速度は小さくて自分は止まっているように見えるだろうが、それは錯覚だ。現実にはある方向に歩んでいるのだし、その方向は自分と似ていない他者が歩んでいく方向とは異なるからである。誰一人として、生きているうちに時間の流れから降りることはできない。それは生きているということの定義なのである。

歩み違えてきた大人達は、互いにアクセスすることができないほど、離れ離れになってしまっている。それまで歩んできた道のりの散開に応じて人は皆個性的であるが、それはある人が別のある人になることができない、という意味においてである。ある人が持っている性質を別の人が持っていない、別の人にできることがある人にはできない、という違いは個性だが、それだけではない。ある人がこれからどれだけ努力しても別の人の性質を持つことはできないし、別の人と同等の能力を身につけることはできない、ということの意味しているのである。現状として互いに異なっているだけでなく、可能性を含

めても互いに異なっていることを、〈到達不可能性〉と呼ぶことができると思う。大人達は互いに到達不可能な地点まで、歩いてきてしまっているのである。

気休めに、似た者同士で集まるのもいいだろう。けれど、到達不可能性を隠蔽するためにそうするのは欺瞞だ。それは真実に背くことになるからである。生きてきただけの時間がこなたとかなたを隔てているということに、意識的である必要がある。大人同士の友人関係はしたがって、自分にできないことが彼にはでき、自分にはないものを彼は持っているというだけではなくて、自分は彼の様にはなれないのだという相互の諦念に基づいてこそ健全である。そのような諦念に基づいて、相互的な尊敬と信頼関係が生まれてくるからである。お互いに自分独自の領分を保つことは、大人の友人関係の必要条件でさえあろう。なぜならこのような到達不可能性によって、相互に不可換であることの対称性が維持されるからである。つまり、「私はあなたのようになれない。あなたは私のようになれない。それゆえに対等だ。」というわけである。**到達不可能性に基づく対等性**が、大人の友人関係を支えている。大人にとっての友人は、到達不可能な他人である。

子供（何歳から何歳までとは、あえて言わないことにする。「子供」という言葉が想起させる一連のイメージが重要だと私は考えている。）のころを思い出すと、様子はずいぶん違っていたと思う。子供には、これから花咲いていくであろう能力の萌芽があちこちに芽吹いているが、大人間の差異と比べれば子供間の差異は小さなものである。また子供は大きな柔軟性を持っているから、差異があったとしても容易に詰めていくことができる。子供は人生の道を歩み始めたばかりであり、旅の出発点での違いが小さいことを考えれば、子供達は互いにそれほど離れた位置にいないということになるだろう。生きてきた時間の短さが、変性と決断の少なさが、子供の特徴である。子供達の歩む道はまだそれほど散開していない。子供達はまだお互いに顔が見える位置にいる。

幼児は、自己中心的な世界に生きている。これは単に道徳的な自己中心性を意味するだけでなく、認識のあり方を巻き込んでのことである。幼児は他人の立場に立ってものを考えることができない。道徳上の問題としては、自分がされると困ってしまうことを他人にしても、それが悪いことなのだと分からないということが挙げられる。「己ノ欲セザルコトヲ、人ニ施スコト莫レ」という黄金律は幼児の辞書にはない。認識のあり方においても、自分にとっての「こっち」が相手にとっては「あっち」であるとか、自分の弟にとって自分は「兄」であるということが十分理解できないのである。幼児は自らに中心化された世界に生きており、自分と他人との可換性が成立していない。

子供は、この幼児の自己中心性から脱しつつある。自己中心性から脱却していく過程で、自他の絶対的な差異から自他の完全な可換性へと、子供は逆の極端に到達することになるだろう。子供は、他の子供をもう一人の自分のように考えている。これは、子供が他の子供が異なった性質や能力を持っていることを知らない、ということではない。子供だって自他の性質と能力の違いぐらい知っているだろう。だが子供は他の子供との違いを認めた

うえで、他の子供のようになれると思っている。子供同士の隔たりは大人のそれと比べれば小さく、子供には柔軟性を秘められているから、事実として子供は他の子供のようになれるのかもしれないが、事実問題はこの際重要ではない。自分は他の子供のようになれるはずだ、と子供が認識していることが重要なのである。

人生においてまだ長い時間歩みを進めていない子供は、他の子供のいる場所に行こうと思えばいつでもいけると思っている。事実であるかどうかはともかく、他の子供は自分がアクセスできるほどの近さにいると思っている。子供のときは、他の子供が持っているものを何でも欲しがったり、他の子供ができることを自分ができないと自然と悔しくなったり、逆に自分のできることを他の子供ができないと苛立ったりする。他の子供が得るものは、当然自分も得るに値すると考えるわけである。これは、可能性の差を認めない過剰な平等性志向だと言えるだろう。子供の友達関係には、大人の諦念が欠如しているのだ。子供達のこのような関係は、大人の間関係と対比して〈到達可能性〉と呼ぶのが適当である。

子供は相互に到達可能であると思っている。友達でいたかったら抜け駆けは許されない。この到達可能性によってはじめて、子供達は友達関係を保っていくことができる。なぜかと言えば、到達可能性によって、相互に可換であるという対称性が維持されるからである。つまり、「私はあなたのようになれる。あなたも私のようになれる。だから私達は対等だ。」というわけだ。到達可能性に基づく対等性に友達関係が依存しているのである。子供にとっての友達とは、到達可能な他人である。

子供のこのような考えは、子供が幼児の自己中心性から完全には脱していないことの証なのであろう。幼児から子供へと成長するにつれ、子供は他人を発見する。しかし他人は、依然として到達可能な他人に限られている。到達可能性とは、その子供自身にとっての到達可能性であるから、子供は世界を自分の基準に結び付けて理解していることになる。もっともこの結びつきは、大人には「幼稚な万能感」と見えるだろうが。このような自分と世界のひそやかな結びつきを緩め、終に解くことになるのは、到達不可能な他人との出逢いである。

到達不可能な他人との出逢いは、何らかの挫折体験と結びついていることが多いだろうと思うかもしれないが、そうとは限らない。子供は負けん気が強く、自らの挫折を認めるのは難しいのではないだろうか。挫折体験よりはむしろ、他の子供との違和がそれとして意識化されたときに、初めての到達不可能な他人に出逢うのだと思う。私の到達不可能性初体験は、確か小学校2年生の時だったが、それは挫折体験ではなかった。

当時の私は何をやっていたのだろう。少し気難しいところがあったが、他の子供たちの中で一際ずばしっこく立ち回っていたらしいことは、同窓生から証言を得られる。何をしていたかといえば多分、他の子供と同じように「ドロケイ」をして駆け回り、テレビゲームの前に他の子と群がっては目をきらきらさせていたのだと思う。

それは、授業中のことだった。「ずこう」の時間に折り紙を切って鎖状につなげて飾りを作っていた時に、私は隣の K という男の子を泣かせてしまった。私が輪を 10 個作る間にその子が 2、3 個しか輪を作っていなかったものだから、無性にいらいらして何か言ったというところだろう。折り紙を重ねれば一回はさみを入れるだけでたくさん帯状の紙が作れることや、糊をつけすぎるとべたべたして汚くなってしまうことを、その子に教えていたところだった。どうしてそれが K を泣かせることになってしまったのかは分からない。いくら注意しても遅々として進まない彼の手つきに、私は彼が傷つくようなことを言ってしまったのかもしれない。あるいは私が過干渉であることに、彼はプレッシャーを感じていたことが原因であるかもしれない。

とにかく彼は泣き出してしまった。笑い声とおしゃべりの声に満ちていた教室は、異質な音に占領されていった。他の子供達は作業とおしゃべりをやめ、私達の班に注目しはじめていた。笑い声とおしゃべりの声は消え、教室はいつのまにか彼の鳴き声だけになった。その時の先生は小柄で眼鏡をかけた女の先生であり、彼女は黒板の左手にある教師机に座って何か作業をしていたのだが、事態に気付いてツカツカと（周りが静まり返っているから、この足音はよく響いて何とも怖いのだ。）私達の班に寄ってきた。「どうしたの、K くん？」

彼は何も言わずただ恥ずかしそうにすすり泣いているだけだった。私は彼が泣き出してしまったことに当惑しつつも、自分は悪いことをしていないという気持ちもあり、みんなから注目されていたこともあったので、先生から目をそらし何も言わないでいた。私が犯人だと分かってしまったのは、正義感の強い同じ班の女の子が僕のことを指差して、私を犯人として告発したからである。この時までには、クラスの生徒全員が事の成り行きを見守るようになっていた。

その女の先生は決して怖い先生ではなく、普段はむしろやさしい先生だった。子供をしめるのはいかにも苦手そうで、私はそれ以前にも他の子供が怒られるのを何度か目撃していたが、いかにも無理をして作ったようなしわを眉間に寄せて、少し甲高い声で（しかし丁寧語で）子供の非を問い質すという感じであった。だが自分がいざ叱られるとなると、状況は違って見えるものである。「榊原君、こちらに来なさい。」私は他の子供の少し意地悪な好奇心を一身に受けながら先生の後について教室を出て、廊下で先生と一対一で向かい合った。

冬の寒い日だったので、暖房の効いている教室から冷たい廊下に出て、一気に張り詰めた気持ちになった。クラスメートにも見放され冷淡な空気に囲まれて、何とも心細かったのを覚えている。先生は、教室の暖気を漏らしていたドアをびしゃりと閉めて、深呼吸をしてから私に語りかけはじめた。どうして K を泣かせたのか、どうして K に悪口を言ったのか、強い口調で訊いてくる先生に私は悪くないと抗弁したかったが、自然と涙が出てくる。私は半べそをかいてほとんど何も言えずに、先生の叱る声をただ聞いていた。多分 K を泣かせてしまったことに少なからぬ罪悪感を抱いていたのだと思う。不当な罰への憤り

は罪悪感に入れ替わったが、どうしてこんなことになったのかという腑に落ちなさは拭えないでいた。

実際には2、3分間ぐらいのことだったと思うのだが、嫌な経験は長めに感じるという公式通り、私としては10分間ぐらい廊下で叱られていたような記憶がある。私が反省している様子を見て、先生の声は急に優しくなった。はじめにきつく叱って、生徒が反省したあとで慰めるのがその先生の常套だと知っていたが、いざ当事者になってみると、まさに福音の到来である。先生は私とKの性質の違いを指摘するつもりだったのだろう。「K君はのんびり屋さんなのよ。」最後に先生がこう言った時に、心のわだかまりが瞬時に解消し、はっ、と新しい世界がひらけてきたような気持ちになったことを今でもはっきりと覚えている。私が先生に叱られるよりも前からあった腑に落ちなさは、その時一挙に氷解したのだった。

事件はこれでおしまいである。どうして、そして何が氷解したのだろうか。もちろん「のんびり」や「のんびり屋さん」という言葉は知っていた。けれど当時の私には、信頼できる大人が実際にそれらの語で人を形容している所を聞くのは、初めてだったのである。もしかしたらそのような事態には以前にも遭遇していたかもしれないのだが、その重要性をそれとして認識したのは、とにかくその日が初めてだったのだ。そもそもなぜ私がKにあれこれ干渉したかといえば、しっかり作業すれば自分と同じだけ作業ができるはずだと信じて疑わず、自分とは違うスピードで作業を行うKに苛立ったからである。私が10個輪を作る間にKが2、3個しか輪を作らないのだとしたら、それは彼の一時的な怠慢や無知に由来するはずであり、うまいやり方を教えたり怠慢を指摘したりすれば、Kも自分と同じようにできるはずだと考えていたのである。Kの作業が遅いのは彼がのんびり屋さんだからである、という新たな「説明」の仕方を知ってしまった私は、これまでそれ以外の理由（つまり、怠慢や無知）で説明せねばならなかった性質や能力の差という問題を一気に解決する、全く新しい方法を獲得したことになる。

子供の友達関係は、到達可能性の信念に基づいている。この日の出来事は、到達可能性という偽りの前提が維持しえないことに、私をはじめで気付いた時であった。それまで人が形容されるのを聞くことがあったとしても、それは人の悪口を言う場合だけであった。悪口はものの弾みで出てくるのであって、何か腑に落ちない行動を説明するために言うのではない。説明する目的で、冷静に人を形容するのとは大違いである。「Kはのんびり屋さんだ。」と言えば、それによってKに感じる違和感を説明できるようになる代償として、のんびり屋さんではない私とのんびり屋さんであるKの間に、越境しがたい区別の壁が打ち立てられてしまう。こうして到達可能性は打ち破られ、子供は大人へと一步一步近づいていくことになるだろう。

それまで私とKはよく遊んでいたが、その事件以降は疎遠な間柄になってしまった。Kの方にも自分を泣かせた張本人を恐れる気持ちがあったと思うが、私に身体障害者に遠慮するような意味での遠慮がKに対して芽生えてしまったことが大きかったのだと思う。私

にとって K はもはや自分と同じではなく、「のんびり屋さん」という別の世界の住人であった。当時の私は、到達不可能な他人と交流できるほど大人ではなかったのである。